ミンダナオの風

発行：ミンダナオ子ども図書館　松居友
５６号・２０１６年１０月

保育所支援を初めて10年あまり、
保育所を70棟と、下宿小屋を5棟建てた。
しかし、建ててから5、6年もたつと、
さすがにあちらこちらに傷みが出てくる。
基礎のコンクリートは、壊れないけれど
竹壁やトタン屋根の一部が、突風や豪雨、
ときには戦闘で破壊される。
建設後の贈与式では、
村長、福祉局、保育士と
ミンダナオ子ども図書館との間で
正式な書類にサインがなされ、
その中の一文は
「贈与後の修理修復は、村で行うこと」
というのがあるのだけれど、
日々の食事にも窮している村では、
わずかな修復費も、出すことが出来ない。
あえて、そのような極貧の村を選んで
保育所を建てているので当然・・・？
総コンクリートという選択肢もあるけれど、
外から流れてくる風が通らず、
熱帯地方では、蒸し暑くなるのが難点。
とは言っても、崩れた竹壁を見るにつけ
支援してくださった方々に申し訳なく
今年から全ての保育所をチェックして修理し、
土台と壁と屋根を、全てペンキで塗りなおし、
黒板と机やイスも
状況に応じて修復することにしました。
よろしければ保育所修復費の寄付を、
わずかでも良いので、お願いいたします！
保育所がきれいになって
子供たちが大喜び出来るように！

Mindano Children's Libary Foundation, Inc.
MCL
SEC REG.NO.CN200315083

ダバオと日本と戦争

宮木　梓

ミンダナオ子ども図書館からハイウェイを車で3時間ほど走ったところに、ダバオという大きな町がある。立派な空港があって、日本からMCLに来る人のほとんどは、ダバオに到着する。

日本でダバオの町は、どのような印象があるだろうか。果物の王様と呼ばれるドリアンで有名な町、それとも性格が激しいと噂される新しいフィリピン大統領が市長だった町、あるいは、先日爆弾テロがあったのでニュースで名前を聴いたけれど、それまではダバオという町を知らなかったかもしれない。

1941年12月に太平洋戦争が始まるまで、ダバオの辺りには2万人以上の日本人が住み、当時の満州に次いで大きな日本人社会を築いていた。

1904年頃から、ミンダナオに入植し始めた日本の農民たちは、土地を開墾し、アバカ麻の農園を作った。彼らは、夜明けから日の沈むまで必死に働き、麻の生産量は飛躍的に増えた。当時、アバカ麻で作ったロープは軍需品として高騰し、ダバオは栄えた。

しかし、戦争で麻農園は壊滅した。フィリピンは、膨大な民間人の餓死者を含む110万人を超える犠牲者を出して、戦争は終わった。

戦後、フィリピン政府は崩壊した麻農園の生産を回復することができず、麻農園はドールやデルモンテなどの多国籍企業のバナナ農園に変わった。そして、現在、日本に輸入されるバナナの90パーセント以上が、ミンダナオで生産されている。

この夏、横浜から琴子さんがMCLを訪ねて下さった。2年前にも祖母やいとこたちとMCLを訪れたことがあり、今回は2度目の訪問だ。戦争中にダバオにいた日本人や、戦後ミンダナオに残された残留日系人に興味があるのだと言う。

彼女の祖母は、1934年にダバオで生まれた。戦争が始まり、最後はジャングルを彷徨いながら日本が負けるまで逃げ延び、その後、家族で帰国したそうだ。

彼女は最初、自分の経験した戦争を話で聴かせても、経験していない人たちには分からないだろう、と思い沈黙していた。しかし、日本がまた戦争をしないためにも語らなければならない、と自身の体験を話し始め、琴子さんにもよく聴かせて下さったそうだ。

祖母の両親は山口県出身で、食料が無いのと大東亜共栄圏を広げる移民政策に乗ってダバオに移った。移民で来た当初は、輸出関係の仕事をしていたらしい。住んでいたのはダバオのクラベリア通りの日々新聞社の前で、ダバオには今もクラベリア通りという名前が残っている。

祖母が小学1年生だった年に真珠湾攻撃があり、日本軍はフィリピンにも侵攻した。祖母の両親は、戦争が始まってからは日本軍の指示する通りの仕事をしていた。1942年頃の両親は、若い日本人兵士たちの下宿屋もしていたそうだ。美術系の学生らしい兵士が泊まっていて、絵を描いたり、祖母に歌や楽器を教えてくれた。

戦局が悪化してからは、2～3回引っ越した。その度に荷物を捨てて、物は少なくなった。最終的にはタモガンという内陸のジャングルに逃げた。何も無いから、木の実を採ったり、木の根を食べた。何よりも日本兵に会って、塩を取られるのが怖かった。

逃げている途中、ジャングルの中で1歳だった弟が病気で死んでしまった。その時は日本兵が火葬してくれた。弟を焼いているときに、小さな頭蓋骨の「パキン」と割れた音が、今でも耳に残っている。逃げているときに、泣いたことはない。そんな暇はなかった。とにかく、ジャングルの中を逃げて、逃げて、逃げて…。

ある日、空から紙が降ってきて、戦争が終わったことを知った。祖母の父は一緒にいた日本人と集まって、もっと山奥に逃げるか、自決するか、米軍の捕虜になるかを話し合った。父は家族に「生きて帰ろう」と言い、着ていた服を三角に割いて棒に結び、白旗を作ってみんなで山を下りた。米軍の保護を受け、彼らの船で浦賀にたどり着いた。途中で亡くなった人は、海に流した。

その後、家族は浦賀から山口に戻り生活を立て直して、祖母は学校を卒業し、幼稚園の先生になった。そして、

祖父と出会い、父が生まれ、琴子さんにつながっている。

ＭＣＬに滞在中、琴子さんはマグペットに、父が日本人だという老人に会いに行った。

オーラン・Ｅ・キムラという名のその老人は、戦争が終わった時１６歳だったという。記憶が曖昧なところもあったが、彼の父は木村という日本人で、ダバオから内陸に入ったカリナンでアバカ麻を栽培していた。

母親はタガバワ・バゴボ族。ダバオは当時、バゴボ族の土地だった。日本人と現地のバゴボ族の女性が、正式な結婚ではないが一緒になることは少なくなかったのだそうだ。老人は７人兄弟だった。戦前、日本人を父に、現地人を母にもつ子どもがたくさん生まれた。

戦争が始まるまでの生活は良かった。戦争が始まると、麻農園を捨ててジャングルに逃げた。逃げ惑うなかで、日本人である父は栄養失調から病気で亡くなり、母は親類を頼って北コタバトのマキララまで逃げた。生き残った日本人の多くは、戦後、妻子を残して帰国した。

戦後しばらくは、日本人の子であることを隠さねばならなかった。老人は食糧難を耐え、生活を再建し、現地の女性と結婚し、今では孫がいる。日本語を話すことはできず、ビサヤ語でもなく、少数民族のことばで話す。彼は、父について９歳頃から麻農園で働いていたため、学校には行かなかった。今でも字が読めず、サインをするときは親指の先にインクをつけて爪を押す。

ミンダナオには、今も戦争で残された日本人の子孫がたくさん生きている。ＭＣＬの奨学生の中にも、日本人の苗字を持つ子どもたちがいる。

琴子さんは２年前にダバオやＭＣＬを訪ねた際、祖母から「戦争は良くない、戦争は怖いからね」と、繰り返し繰り返し聴かされた。

祖母と、祖母の支援している奨学生を訪ねてイスラム地域のピキットに行った時に、その辺りでは最近も紛争があったのだと知った。太平洋戦争とピキットの紛争、形は違うけれど、戦争は過去のことではないのだ、と思った。

祖母が戦争中ジャングルに逃げる際に通ったというカリナンの森は、今はうっそうとしていない。高度成長期にフィリピンでも多くの木が切られ、日本に輸出されたのだという。祖母たちが逃げ込んだジャングルの木々も、日本で紙にするために切られたのかもしれない。

琴子さんは感じたそうだ。戦争が終わっても、形を変えて、日本はフィリピンの色々なものを奪っているのかもしれない、と。

先日、新潟から来られた８人の方と一緒に、カリナンに近いミンタルというところにある日本人墓地を訪ねた。

もとは「インタル」というバゴボ族の首長の名前であり、地名だったインタルに、ダバオに麻農園の太田興業を起こした太田恭三郎は、日本人が多くとどまるよう「民多留（ミンタル）」

の漢字をあてた。日本人町の面影のなくなった今でも、その町は「ミンタル」と呼ばれている。

その小さな墓地には、フィリピン人のお墓もたくさんある。大きな樹が根を下ろし、枝を広げている。いつ来ても静かだ。私たちが墓地に入ると、小さなおばあさんが一人掃除をしていた。毎朝掃除をして下さっているらしい。「私も日系人なのよ」とおばあさんが言う。

大きな樹の影に入ると、そこを通る風は涼しい。静かだ。南の国の朝の太陽が木漏れ日から、ちらちらと光っている。

参考文献：鶴見良行『バナナと日本人』岩波新書　１９８２年

奨学生の紹介、質問、現地訪問、機関誌停止その他に関するお問い合わせは、
メール：　mindanao@gmail.com　現地日本人スタッフ　宮木梓（あずさ）
FAX：　0743 74 6465　日本事務局　前田容子

わたしの少女時代の思い出から（3）

松居　エープリルリン

（妻のエープリルリンが、少女時代からミンダナオ子ども図書館に至るまでの、自分の体験を書いていきます。初回は、すでに拙著『手をつなごうよ』（彩流社）に掲載された文の引用ですが、その後は、この機関誌上で連載していきます。機関誌は、寄付を下さっている方々に、お送りしています。松居友）

おばあちゃんが叔母の家に滞在している間だけは、私は本当に幸せだった。なぜこんなに幸せな気持ちになれるのか、わからないほど幸せだった。

初めて私は、じぶんが本当の普通の子どもになれたような気がしたの。

友だちと外で遊ぶこともできたし、いつも台所仕事をし続けなくても良かったし・・・。

私は、外に飛びだしていくと、ゴム段飛びや石けりや缶けり、鬼ごっこやかくれんぼ、ハンカチ落としもしたわ。ジャンケンポイや、後ろの正面だーれ、花いちもんめみたいな遊びもした。

とってもとっても幸せで、時間のたつのがわからなかったぐらい。そして、気がついたら夕暮れで、あたりは暗くなり始めていた。狭い路地裏で、虫たちやカエルの声が聞こえてきた。

私は、急ぎ足で家へとむかった。胸はドキドキ、息を切らしながら・・・。

暗闇から、誰かが私の名前を呼んだような気がして振り向いたけれども、何も見えなかった。大きなマンゴーの木が、小道の横に生えていて、大枝が伸びて小道を真っ暗におおっていたわ。

とつぜん、冷たい風が顔に吹きかかって、耳につぶやき声が聞こえたような気がして、髪の毛が逆立った。

私は、そこを必死に駆け抜けたの。息が詰まったような感じで、喉がかわいたの。ちょっとでも良いから、お水が欲しい！

そしたら、向こうの方に、明かりが見えて、人の話し声が聞こえたわ。とってもうれしくなったけど、一方で悲しくなってきた。なぜなら、叔母さんの家だったから。

家に近づいて、扉の前の段を上がってドアをたたこうとしたとき、中から声が聞こえたわ。

「いったい、あの子は、どこに行ったのかね。大丈夫かね、」ほとんど夕食をたべる時間で、おばあちゃんが叔母さんにたずねたのね。

すると叔母さんは答えた。

「あの子は、いつもあんな調子なのよ。帰りが遅いし。私には、あの子がどこに行ったのか、さっぱりわからない。まったく、心配ばかりかけるんだから！」

私がいつも外に遊びに行って、夜遅く帰ってくるなんて嘘よ！

ドアの後ろに立っている私の耳には、叔母さんが、沢山の嘘を言っているのが聞こえてきた。

私は、ドアをたたいて、こんばんわを言って中に入った。そして、叔母さんとおばあちゃんの手を額につけて、祝福をうけた。

「おそくなって、ごめんなさい。お友だちと夢中で遊んでいて、暗くなるのがわからなかったの。」

謝ると、おばあちゃんが言った。

「わかったわ。でも、二度と遅くならないようにね。女の子でしょ。夜道を歩いていて、襲われて、レイプでもされたら大変だからね。」

すると今度は、叔母さんが言った。

「暗闇だったら、だれも助けることが出来ないのよ。そうなったら、私の責任になるんだからね。」

「わかりました。ごめんなさい。もう二度としません」と、私は答えた。

その日の夜、夕ご飯が終わると、みんなでお皿を洗ったり台所の後かたづけをしたので、私、ビックリしたわ。

叔母さんは私に、台所を全部きれいにしたら豚に餌をやって、それが終わったら外の井戸で水を汲んでこいと、命令しなかったし、洗濯もさせなかった。そのうえ、真夜中の１２時に、叔母さんの妹を国道まで迎えに行かなくても良かったから・・・。

そのかわり、私はまだ小さいし、夜遅くまで起きていないで早く寝なさい、と言ってくれた。

私、本当にビックリ。

何故こんなになったの?おばあちゃんがいるからかしら?本心から、言っているのかしら?いつまで、続けるかしら?

沢山の困惑と疑問が、パズルのように飛び交った。

私は、子どもの頃から、沢山の試練を経験したの。

本当だったら、大人になってから体験するような試練をね。避けることの出来ない試練だったし、私の意志では、どうすることも出来なかったから。

本当に、ときどきおもったわ、人生って不平等だって。

ある人たちは、必要以上の物を所有しているのに、ある人は何も持っていないんだもん。ある人たちは、貪欲にたくさんの物を得ていくけど、他の人たちは、ちょっとしたものでも得られない。

コケコッコー！

鶏の鳴き声がして目が覚めた。早朝、お日様が顔をだした。

朝食の用意が出来ていて、学校に行く支度がすむと、私は浴室で水浴びをした。

すると、おばあちゃんが叔母さんに、こう話しかけているのが聞こえてきた。

「わたしは、妹のジェクを家に連れていくわ。あなただけで、二人の子どもの面倒をみるのは、大変そうだから。エープリルを、ここに残してね。」

とつぜん、私の目から涙がこぼれてきた。

何も聞いていなかったような顔をして、部屋のなかに入っていくと叔母さんが言った。

「学校に行く用意はできた?」

「ええ。」

そう答えたものの、妹が私を置いてきぼりにして、行ってしまうかと思うと、寂しくって言葉を継ぐことも出来なかった。

妹のジェクは、申し訳なさそうに言った。

「私、おばあちゃんの所に行くことになったの。」

「ええ」私は、それしか答えようがなかった。

おばあちゃんが、叔母さんに言った。

「ビン、それじゃあ、私たちは、出

かけるからね。」

「わかったわ。お気をつけて。またいらっしゃってね」

私たちは小道に出ると、私は学校に向かい、おばあちゃんと妹のジェクは、おばあちゃんの家に行くために乗り合いジープの停留所に向かった。

私は、妹に言った。

「元気でね。おばあちゃんのところで、いたずらっ子したら駄目だよ。いい、わかった。」

そして、私たちは、抱きあってそれから、さようならを言った。そして、手をふりながら、私は、妹とおばあちゃんの姿が見えなくなるまで見送った。

（つづく）

自由寄付は、一番根幹になる寄付です。
貧困集落に住んでいる子供たちの薬から手術に至るまでの医療費。
保護を必要として、MCL 本部や下宿小屋に住み込んで学校に行かせている
２００名ほどの奨学生の食費、生活費。ガソリン代を含む活動全般の諸経費等々。
機関誌を楽しみにしている方の場合は、わずかな寄付でもお送りします。
他の方々に紹介していただければ幸いです。

下宿小屋と保育所

松居友

ただひたすら、現地の子供たちの事のみを考えて、走り出したミンダナオ子ども図書館。

数名の若者たちと始めた特定非営利法人（現地では、NGOと呼ばれている）「ミンダナオ子ども図書館」は、現在600人弱のイスラム教徒、先住民族、クリスチャンの子どもたちを小学校から大学まで行かせ、中でも虐待されていたり、時には街角に立たされていたような、保護を必要としている子たちを、キダパワンの本部に住まわせて寝食をともにし、近くの学校に通えるようにしてあげています。

本部に住んでいる子の数は約80人で、5棟ある下宿小屋の子どもたちとスタッフ家族をあわせると、約200名近い子たちを食べさせています。毎月の米の消費量は100キロ！田んぼを手に入れて自給しています。

活動範囲も広大で、3000メートル弱のフィリピンの最高峰アポ山を一周し、それに東南アジア最大のワニのいるリグアサン湿原も加えたほどの広大な活動地域です。北コタバト州をはるかに超えてしまうので、現在フィリピン政府直轄の非営利法人としての許可に！（活動範囲に関しては、サイト検索『ミンダナオ子ども図書館・日記』で地図を掲載しています。）

MCL（ミンダナオ子ども図書館の略称）の活動は、多くの集落に住む多くの人々や子どもたちと、ヒナイヒナバスタカヌナイ（ゆっくりゆっくり、たえることなく）友情と愛の中で、途切れることの無い交流を続けていくのがモットーです。このような中で、いわゆる反政府ゲリラ地域と呼ばれている人々も（別に普通の住民たち）心を開いて信頼してくれるようになり、やがて悩みを打ち明けて、支援を求めて来たりするようになりました。

その中の一つが、保育所と下宿小屋。

2006年ごろでしょうか、フィリピン政府が、「幼稚園をへなければ小学校にあがれない」という制度をつくりました。理由は、ABCもわからない子が学校にくると、先生がたいへんだということ。そして、小学校に併設して、幼稚園が作られたけれど、山奥に広がる広大な貧困集落からは、学校までは8キロ以上、朝の4時には家を出てジャングルの中を通わなければなりません。小学生でも遠くて学校に通えない子が多いのに、4，5歳児が行けるわけが無い。それで、保育所でも良いという事になったのです。保育所といっても日本のように、子どもをあずかる場所ではなく、就学前の子どもたちに毎日2時間ほどABCを教える場所です。

ところが、保育所の建設は、集落単位なので。現金収入が無く、一日3食たべられないような貧しい集落の人々が、自分たちの力で保育所など建てられるわけがありません。大きな木の下などで、保母さんが教えていところがたくさん出てきました。「蚊も多いし、雨が降ったら大変。簡易保育所でも良いから、なんとか建ててもらえないだろうか・・・」という、悲鳴に近い声が聞こえてきました。「日本の支援者の方々にうかがってみましょう。」それが、保育所建設支援の開始でした。

保育所建設を開始して、10年ほどが経過。すでに建てた保育所の数は、70棟をこえるぐらいですが、まだまだ足りません。無限に貧困集落が、広がっているからです。

当時は、福祉局から「なるべく多く建てたいので、小さめの簡易保育所でも良いから建てて欲しい。ただし、壁は竹で良いけれど、土台は土では無く、メントでやりましょう」という結論になりました。ところが10年もたちますと、問題が出てきました。特に竹壁は腐りやすく修復が必要なのです。契約では「建設後の維持と補修は村の責任」になっているのですが、貧しい村では予算も出すことができません。

今後の保育所建設とお願い

ＭＣＬでは、現地の子供たちの事、そして支援者の方々の事も考え、これから数年間かけて、全保育所をチェックし直し、スタッフが現地の人々と協働して、経費を抑えて自分たちの手で、補修とペンキ塗りをしなおし、崩れた場合や私物化されてしまった場合も、可能な限り建て替える事にしました。

しかし、修復や立て替えの資金が大変。私が書いた絵本『サンパギータのくびかざり』（今人舎）や青少年向けの『手をつなごうよ』（彩流社）、再版された『わたしの絵本体験』『昔話とこころの自立』『昔話の死と誕生』（教文館）などの著者印税も全額ＭＣＬに寄付しているのですが、とても間に合わない状況です。

皆さん、よろしければ寄付をお願いいたします。拙著を買っていただくだけでも、寄付になります。よろしくお願いします！

また、今後の事も考えて。簡易保育所はストップして、スタンダード保育所のみにしました。簡易（テンポラリー）保育所との違いは、規模が大きく、扉と便所が二つあり、セメント壁を高くしています。またスタンダード保育所も、支援者と現地の要望により、２種類にしました。

①、竹壁を残して建てる。

熱帯の暑くなる地域の場合は、竹壁を残した方が風通しが良く、子どもたちが過ごしやすいからです。

②、総セメント製

洪水が頻繁に起こったり、山岳地域で強い風雨にさらされて痛みやすい場所は、総セメント製で建てます。

両者ともに、壁からトタン屋根にかけて塗装し、数年ごとに補修していきます。費用は、資材の高騰が激しいのと修復も考慮して、①が９０万円、②が１３０万円とさせてください。

補修した後の保育所で、子どもたちが大喜び

保育所建設と平行して実施してきたのが、下宿小屋の建設でした。

下宿小屋を建ててきた最大の理由は、山の村には学校まで遠くてかよえない子たちがいるからです。特に、高校になると校舎は、はるか麓にしか無く、とても歩いて通えません。大学に至っては、遠い町に有るだけです。極貧で兄弟姉妹が多い場合は、ご飯も食べられずお弁当ももっていけず、学業を停止。特に、孤児、片親の子たちの場合は、深刻な問題です。

解決として考えられるのが、高校や大学のある町や村に、下宿小屋を建てて、そこに泊まりながらかよえるようにすることでした。しかし、泊まれるだけでは駄目です。極貧の子どもたち特に孤児の場合は、親がお米の支給も出来ず、食材も買えません。そんな子たちのために、下宿小屋には親がわりのスタッフが常駐して、生活指導をして食事もていきょうしています。おかずの野菜などは、種を支給して、自分たちで作っています。

現在、下宿小屋は５棟あります。

①・まずは、ミンダナオ子ども図書館の本部で、ここには８０名の子どもたちが住み、近くの小学校や高校大学に通っています。小学生までは男女が住めますが、高校（日本での中学と高校をこちらでは高校と呼ぶ）になると、福祉局の指導で男女を分けなければならず、高校生は女子だけです。

②・キダパワンの町の中に、大学生と高校生の男子が住むための寮があります。小学校を卒業した男子は、こちらに移住して、町中の高校に通います。

③・本部に併設して、大学生の女子寮が完成しました。敷地を分けている理由は、大学生の場合は、夜遅くなったりバイトをしたりすることが許されているからです。恋愛もＯＫですが、妊娠したりさせたりしたら停止です。

④・マロゴンという名の山村に小学校と高校があり、そこに男子寮をつくっています。ハウスペアレントのス

補修した後のラナコラン下宿小屋

詳しくはウエッブサイト参照
「検索：ミンダナオ子ども図書館だより」
http://www.edit.ne.jp/～mindanao/mindanews.htm
フェイスブック：松居友
松居友メール：mcltomo@yahoo.co.jp

タッフが常駐し、米を支給しているので、そこに住めば孤児、崩壊家庭の子たちも食べて学校に通えます。

⑤・同様の境遇の小学生と高校生のための女子寮を、ラナコランに建てています。日本からの訪問者や若者たちもここに寄り、さらにここからキアタウ等のマノボ族の集落に泊まって、子どもたちと遊んだり、川に洗濯に行ったり、植林をしたりしているのでご存じの方も多いと思います。

日本の若者たちも視野に入れて、第⑥棟目の下宿小屋を海に計画。

ＭＣＬ本部や下宿小屋を日本から訪れた若者たちが訪れて、子どもたちと遊んだり、植林体験をしたりすると、感動して泣きだします。帰る時にはもっと泣いて、ミンダナオの子どもたちから生きる力、友情と愛と勇気をもらって日本に帰っていくのです。そんな様子を見るにつけて、数年前から、日本の子供や若者たちを視野にいれて活動する決心を固めました。

子どもの向こう側、対岸のヤシの林に土地を確保しました

１５年ぶりに日本を振り返って、子どもたちを見て驚いたのは、精神や心の不安定、満たされない生活感、孤独感、生きる力の欠如や引きこもり、はては多発するいじめや自殺。こうした子どもや若者たちの現状を見るにつけて、彼等の心を癒やし、生きる力を回復させてあげるためにも、現地の子どもたちと出会う、友情と愛の生活体験をさせてあげる場が必要ではないか、と思うようになりました。

すでに、関西国際大学、関西大学、関西学院大学、沖縄大学、同志社大学、佼正学園、創価大学、立教大学、文京学院、ＩＣＵ、お茶の水女子大、一橋大学、学習院、桃山学院、立教女学院、秋田国際大学、立命館アジア太平洋大学、上智大学などなどの若者たちがおとづれて、ともに遊んだり、山のマノボ族の村にとまって読み語りや植林体験をしたり、平和の祈りの集いをしたりして感動して帰って行きました。

また、地元の大学でソーシャルワーカー（社会福祉士）のコースを学んでいる学生たちも、毎年３ヶ月の体験学習をして感動して帰って行きます。

注意深く３年ほど様子を見ながら、現地スタッフや理事と話を重ね、滞在者のポリシーも煮詰めて、今年から日本の青少年を視野に入れた支援活動を開始することに決めました。その一つが、日本からの支援者の強い希望もある「海の下宿小屋をダバオ州のサンタマリアの素朴な漁村に作ること」で、すでに土地を購入しました。そこに海の下宿小屋を作り、孤児たちが学校に通えるようにすると同時に、日本からの若者たちも泊まったり、素朴な漁師さんたちの家に民泊したりして、リゾートでは出来ない真実の生活体験が出来る場所にしようと思っています。（現地の写真が、サイト『ミンダナオ子ども図書館・日記』に出ています。）

漁師さんの家に、泊まることもできますよ

驚くほど素朴で美しい白浜の漁村です。ＭＣＬでは、訪問者を家族として招きますので、宿泊費はとりません！皆さん、日本の子供や若者（中高年もＯＫです）のためにも、下宿小屋を建てる寄付をお願いできませんか。

ＭＣＬに滞在しながら、いっしょに保育所の修復や、山に学用品や古着を届けたり、奨学生の選択や調査が出来れば、生涯忘れられない良い経験になると思いますよ。

講演会、報告会、家庭集会に、松居友が講演料、謝礼に関係なくうかがいます。
サイト『ミンダナオ子ども図書館だより』から年間のスケジュールをクリックすれば、空き日が確認できます。
メールや電話でもお申し込みください。
メール：mcltomo@yahoo.co.jp
電話番号：080－4423－2998（日本および現地転送・松居友）

この子たちの支援者になっていただけませんか！

Mujahed G. Guiamalon　15歳　マギンダナオ族　マノンゴル小学校６年生

僕は、2001年６月20日生まれの15歳、今年度の新学期が始まった６月からMCLに住み、学校に通っています。

日本では中学３年生になる歳だけど、僕はまだ小学６年生です。４年前の12月に大工だったお父さんが高血圧で突然死んでしまいました。お母さんは、家でご飯を炊いて、鶏肉のおかずを作って、近くの小学校に売りに行っているけれど、収入は少しで、僕も学校に行けない期間があったから、学年が遅れています。けれど、クラスには学年が遅れてる子がたくさんいるから、僕も恥ずかしがらずに頑張っています。

MCLの奨学生になったのは、お父さんがいなくても大学を卒業したいと思ったからです。僕は４人兄弟の末っ子で、姉が２人、兄が１人います。姉は２人とも結婚したけど、兄はこの８月に高校を止めてダバオに働きに行きました。家にお金が無いんです。

僕は、将来、高校のタガログ語の先生になって、家族を助けたいです。できれば、故郷（イスラム自治区マギンダナオ州パガロンガンのカルボガン村）に戻って、そこの子どもたちに勉強を教えてあげたいな。

僕は、踊ることも歌うことも好きです。一番好きな歌は、マギンダナオ語の「Ilila nengka ina」という歌。お母さんからお乳を飲むって意味だよ。歌は、お兄ちゃんの携帯電話やラジオで覚えました。

好きな野菜はナスビで、好きな魚はティラピア、好きな色は青色、バスケットボールをするのも大好き！

人生で大切なものは、家族と、勉強を続けること、そして、学校を卒業することです。お兄ちゃんがダバオに出て、お母さんは家に１人残って心配だけれど、勉強をあきらめたくないです。

Hitomi T. Yamamoto　12歳　日本人／イロカノ族　マノンゴル高校１年生

私はカトリックを信仰していて、好きな色は紫色、ダンスをするのが好きです。

父は日本人で、ヤマモトタカシという名前です。母が日本に働きに行っているときに出会い、結婚したそうです。

私は2004年にダバオで生まれました。でも、私が小学２年生くらいのときに、両親は別れてしました。父がいつもお酒を飲んでいて、夜遅くでも母に「酒を買って来い」って命令するから、母が家を出たんです。母はマニラに出稼ぎに行き、私は祖父の家に預けられました。母はマニラで出会った男性と再婚し、私には父親の違う４歳と２歳の弟がいます。私は新しい父も弟たちも好きです。でも、マニラで兵士をしていた新しい父は、今年の４月に病気で死んでしまいました。

母も仕事がないから、今はマタラムのニューアブラというところにある祖母の家でキャッサバ芋やサツマイモ、オクラ、モロヘイヤ、モンゴ豆、バナナを植えて生計を立てています。そこにいたときは、私もサツマイモを植えるのを手伝っていました。

MCLにはこの６月に母に連れられてきたばかりです。祖母のうちでは３食食べられたけど、高校は遠いし、宿題に使う学用品を買うお金がうちにはないから…。家族と離れても、高校を卒業して、大学に行って、小学校の先生になりたいんです。子どもが好きだし、母が「先生になってね」っていうから。私はいつもお母さんと一緒にいたから、お母さんが大好きです。

日本人の父とは、母と別れた後も時々会って、少しお金を助けてもらっていたけれど、2015年の６月頃に突然いなくなってしまいました。父はこっちのフィリピン人と金を探して掘る仕事をしていたそうだから、殺されたのかも…って近所の人は言っていました。日本の父との思い出は、服を買ってくれたこと。父は静かな人で、60歳に近くて、ほとんど日本の話をしなかったし、日本語も教えてくれませんでした。私と話すときはタガログ語でした。日本の食べ物もほとんど食べなかったけど…、あ、でもワカメに似た海藻が好きで、良く食べていたな。私は海藻、好きじゃないけれど。父の代わりに、母が日本で覚えた日本語を少し教えてくれます。

母は、日本にいたときいつもチョコレートを食べていたそうです。母は日本をいいところだと言うし、私もいつか行ってみたいな。子どもっぽいけど、雪を見てみたいんです。私は日本語が話せないし、日本のこともほとんど知らないけれど、自分のことを日本人だと感じています。自分の名前のことで「日本人なの？」ってよく聞かれますが、全く恥ずかしくありません。「そうよ、お父さんが日本人なの」と堂々と言います。

今は学校に行っているときが楽しいです。実は、MCLにまだ仲のいい子がいないんです。私はビサヤ語を話せないし、マノボでもムスリムでもないし…。でも、気にしません。母と離れても、高校に行くことが大切だと思うし、母もそれを願っているからです。私の人生で大切なものは、家族、そして勉強を続けて夢を叶えること、それから愛です。私は複雑な家庭に生まれたけれど、いつか結婚して幸せな家庭を持ちたいです。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

小学生（里子）：年間４万円、高校生：６万円、大学生：７万円です。
極貧のなかでも、孤児や崩壊家庭の子で、イスラム、クリスチャン、先住民を均等に採用しています。
支援者の方が、訪問された場合、奨学生に会いに家までお連れします。
ほとんどの子たちが大喜びで、時には抱きついて泣き出します。
何日でもMCLに滞在してください。家族ですので、空港までお迎えに上がり、宿泊費はとりません。

上の子たち以外にも、いまだに１４０名ほどの子たちに、支援者が居ません。
サイト「ミンダナオ子ども図書館だより」から「まだ支援者のいない子たちへ」をクリック
パスワード：mindnaoで、紹介されています。ご覧ください。

奨学生の紹介、質問、現地訪問、機関誌停止その他に関するお問い合わせは、
メール：　mindanao@gmail.com　現地日本人スタッフ　宮木梓（あずさ）
FAX：　0743 74 6465　日本事務局　前田容子

連載　野菜売りの少女

松居友

撃たれた子どもが運ばれてくる

読み語りが終わったあと、ミンダナオ子ども図書館の子どもたちは、前に座っている村の子どもたちに、日本の子どもたちからの贈り物『ゆめポッケ』をわたしはじめた。

受けとった子どもたちは、注意深く『ゆめポッケ』をひらくと、巾着袋のなかから学用品や小さな絵本をひっぱりだした。ぬいぐるみやおもちゃが出てきたときには、歓声があがった。見守っている親たちも、満面笑顔をうかべて、子どもたちといっしょになかをのぞいている。

そんな、子どもたちを前にして、ジサが言った。

「この『ゆめポッケ』はね、日本の仏教徒の子どもたちから送られてきた贈り物なのよ。子どもたちは、一日一食たべないで、そのお金をためて、プレゼントを買って送ってくれたのよ。」

それを聞いて、一人の子が答えた。

「ぼくも、ときどき学校に、お弁当もって来られないときあるよ。そんなときは、お昼ご飯が無いべつの子たちといっしょに、大声で校庭で遊ぶんだ。お腹がすいたことを忘れるためにね。」

ストリートチルドレンの男の子たちは、山の子どもたちに『ゆめポッケ』を手渡しながら話している。

「なんだか不思議な気持ちだな。ぼくら、つい数日前まで、道ばたで物乞いしていたのに、今はこうやってお腹をすかせた子どもたちにお粥を食べさせてあげたり、贈り物を渡してあげたりしているなんて。」

「でも楽しいね。だって、子どもたち、とってもとってもうれしそうな笑顔を返してくれるんだもん。」

「あの笑顔を見ただけで、なんだか心が救われるような気がするな！」

それを聞いて、スイーツがいった。

「そういえば、日本から来た仏教徒の子どもたちも、同じ事を言っていたわ。救ってあげることで、自分が救われているみたいな気持ちだって。」

それを耳にして、ジサが言った。

「そういえば、日本から来た子の一人が言っていたわ。仏教では、施す人がひざまずいて施し物を差し出すんだって。『欲を捨ててこれをあなたに差し出しますから、どうかわたしを救ってください』って。」

ストリートチルドレンの大柄な子がいった。

「何でも独り占めするんじゃなくって、有る人は無い人と分けあって、皆で生きていくことが大切なんだ。」

横で聞いていた、イスラム教徒のノルミアがいった。

「それって、イスラムの教えと全く同じ！」

スイーツが答えた。

「わたしたちマノボ族も、土地も家もお米も作物も、みんな自分のものじゃなくって、神様が創ってくれたものだから、皆で分けあって感謝してお祈りしていただくんだよ。」

ジサが言った。

「貧しい人ほど、食べさせてもらえるありがたさを、心から感じることが出来るもんね。聖書にも書かれている『貧しい人は、幸いである、天国は彼らのものである』って。」

そのとき！

パンパンパン

パンパパーン

ふたたび遠くで銃声がして、「おーい、助けてくれ！」山の方から助けを求める叫び声が聞こえてきた。見ると山の上の方から、少女をせなかにおぶった男が、母親と降りてくるのが見えた。村は騒然となり、男たちは、急な斜面を駆けのぼっていくと、お腹をおさえてふらつきながら歩いている母親をわきからささえた。

パパ友とママ・エープリルは、少女と母親のもとへ駆けよっていくとたずねた。

ミンダナオ子ども図書館のスカラシップは、成績よりも孤児や片親、母子家庭の子、親がいても学校にいけない子を採用基準とし、大学まで通えます。その中の特に何らかの事情で保護を必要としている子は本部に住み、生活を保障。学費の他に、食費、医療費、制服、学用品、小遣い、寮下宿代、生活費等が入っています。

「どうしたんですか？」
少女をおぶっている男がいった。
「撃たれたんだ。鉄砲で撃たれたんだ。早く医者に診てもらわなくっちゃ！」
母親が、お腹を押さえながら弱々しい声でいった。
「兵隊たちが家に入ってきて、『ここから出て行け！』って言ったんです。夫は酋長だから『ここは、先祖伝来の俺たちの土地だ。出て行かない！』といったら、その場でバーーーンと銃で撃たれて、私も撃たれたんです。お腹の所を。そして、娘が駆けよると、この子も撃たれたんです。足を。」
「父さんは、死んだわ！」そういうと、娘はドッと泣きだした。
パパ友がいった。
「早く病院に連れていかなくっちゃ。」
村人たちは、少女と母親を車まで運ぶと後部席に乗せた。パパ友は、ママ・

撃たれた少女の足・本当の話

エープリルを助手席にのせ、自ら車のハンドルを握ってエンジンをふかして走りだした。野菜売りの少女たちとストリートチルドレンたちは、どうか無事でありますようにとお祈りしながら見送った。
「この世に戦争が無ければ良いのに。」

二つの歓迎会

わたしたちが、ミンダナオ子ども図書館にすむようになった日の数日後、歓迎会がひらかれたの。夕方、二階のポーチに、木の長いすがおかれて、そこにわたしたちと母さん、インダイとビビィ、そして5人のストリートチルドレンたちが座ったわ。
「おばあちゃんは、どこにいるの？」

ギンギンが聞くと、母さんが答えた。
「ちょっと行くところがあるからっていって、出かけたわ。近くだって言ってたけど・・・」
わたしたちの前には、ミンダナオ子ども図書館に住んでいる子どもたちが集まってきて、木の床にすわった。なかには、ジサもスイーツもいた。
その日は、イスラムの子が始まりのお祈りをしたわ。アラビア語のお祈りが終わったあと、元気なギターの音がして、全員が立って踊りながら歌いはじめた。
「ロララロラ　ローラー　ロララロラレ
ロラ　ローラー　ローラー　ロララロラレ！」
「ヘイ！」
「ロララロラ　ローラー　ロララロラレ
ロラ　ローラー　ローラー　ロララロラレ！」
「ヘイ！」
どこかで聞いた歌だなあ。そうだ、山菜売りに行くとちゅうで休んだ大岩のところ、あそこで聞こえてきた歌だ。
「ロララロラ　ローラー　ロララロラレ
ロラ　ローラー　ローラー　ロララロラレ！」
「ヘイ！」
ジサとスイーツにさそわれて、ギンギンは、クリスティンとジョイジョイといっしょにイスから立ちあがって踊りだした。
踊りが終わって、ジサとスイーツが、歓迎のメッセージを語ってくれた。その後、マノボ族の歌、イスラムの歌、クリスチャンの歌もうたった。最後に、歓迎の歌をうたってくれた後、みんなが、ギンギンとクリスティンとジョイジョイに向かってさけんだ。
「MCLファミリーにようこそ！」
そして、かけよってくると抱きしめてくれた。
「ここに来て、よかった。」

（つづく）

奨学生の紹介、質問、現地訪問、機関誌停止その他に関するお問い合わせは、
メール：　mindanao@gmail.com　現地日本人スタッフ　宮木梓（あずさ）
FAX：　0743 74 6465　日本事務局　前田容子

Mindanao Children's Library Foundation, Inc.

貧しいからといって、必ずしも不幸とは限らない
私たちの生活の方が、豊かな国の人々の生活よりも
はるかに美しいと感じるときだってある。
けれども、どうにもならないのが、たべられないときと、
お金が無くて学校に行けないとき、病気になっても治せないとき・・・

ミンダナオ子ども図書館支援方法

１、医療や読み聞かせ等の活動全般にかかる経費と子供たちの生活費を支援・・・自由寄付
直接下記の振替口座にお願いします。寄付をくださった方には隔月に機関誌『ミンダナオの風』と１２月には、絵本をお送りします。
自由寄付は、一番根幹になる寄付です。貧困集落に住んでいる子供たちの薬から手術に至るまでの医療費。まだ支援者が見つかっていないにも関わらず放っておけず採用している１４０名ほどの奨学生達の学費。保護を必要として、MCL 本部や下宿小屋に住み込んで学校に行かせている２００名ほどの奨学生の食費、生活費。ガソリン代を含む活動全般の諸経費等々。
機関誌を楽しみにしている方の場合は、わずかな寄付でもお送りします。他の方々に紹介していただければ幸いです。不要の方は、ご一報ください。

２，植林環境支援・・・６万円（ゴム、カカオの木６００本、１ヘクタール、現地作業代）
洪水対策と先住民族が土地を手放さないようにするための、経済自立支援です。

３、保育所・下宿小屋建設支援・・・９０万円（簡易保育所は止め、スタンダードにしました）
総コンクリート製をご希望の方は、１３０万円で可能です。
開所式の参加や訪問も可能です。毎年チェックし、必要な場合は、修理をしていきます。

スカラシップ支援

ミンダナオ子ども図書館のスカラシップは、成績よりも孤児や片親、母子家庭や崩壊家庭の子、親がいても兄弟が多く学校にいけない子を採用の基準とし、大学まで通えます。その中の特に何らかの事情で保護を必要としている子は本部に住み、生活を保障。支援には、学費の他に、食費、医療費、制服、学用品、小遣い、寮下宿代、生活費等が入っています。

１，大学生スカラシップ・・年額７００００円（月額５８３３円）
（大学は、この価格では不可能ですが、自由寄付を不足分に満てています。）

２，高校生スカラシップ支援の方へ・・年額６００００円（月額５０００円）

３，里子支援（小学生）・・・年額４００００円（月額３３３３円）

スカラシップの場合は、振り込み用紙の通信欄に「大学」または「高校」と書いて、振り込んでいただければ、現地スタッフの宮木梓よりお便りします。その後、機関誌に同封して本人からの手紙（英語）、６月にスナップ写真、８月に成績表、１２月にはカードが届きます。プレゼントや文通も可能です。日本語の手紙は、現地で翻訳して渡します。
小学生の場合は、本人からの手紙はありません。プレゼントは可能ですが、文通は出来ません。
事前の紹介や希望、訪問などのご相談は、メールで現地スタッフの宮木梓（あずさ）さんか、FAX で日本事務局の前田容子さんに！
訪問の際は、ダバオ空港にお迎えに行き、MCL に宿泊していただき自宅にもご案内します。

奨学生の紹介、質問、現地訪問、機関誌停止その他に関するお問い合わせは、
メール：　mindanao@gmail.com　現地日本人スタッフ　宮木梓（あずさ）
FAX：　0743 74 6465　日本事務局　前田容子

詳しくはウエッブサイト参照「検索：ミンダナオ子ども図書館だより」
http://www.edit.ne.jp/ ～ mindanao/mindanews.htm

ゆうちょ振り込み口座　00100-0-18057：加入者名　『ミンダナオ子ども図書館』

（インターネットバンキングも可能です）■銀行名　ゆうちょ銀行　■金融機関コード　9900
■店番　019　■預金種目　当座　■店名　〇一九 店（ゼロイチキユウ店）　■口座番号　0018057

講演会、報告会、家庭集会に、松居友が講演料、謝礼に関係なくうかがいます。
サイト『ミンダナオ子ども図書館だより』から年間のスケジュールをクリックすれば、空き日が確認できます。
メールや電話でもお申し込みください。

メール：mcltomo@yahoo.co.jp 電話番号：080－4423－2998（日本および現地転送・松居友）

現地住所：Mindanao Children's Library Foundation, Inc.
Brgy. Manongol Kidapawan City North Cotabato 9400 Philippines